

Title	戦争本質論の一研究：クラウゼウィッツの戦争論を中心として
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.10 (1941. 10) ,p.1264(70)- 1310(116)
JaLC DOI	10.14991/001.19411001-0070
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19411001-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦争本質論の一研究

——クラウゼヴィッツの戦争論を中心として——

加田 哲 二

- 一 國家と國家との交渉・關係
- 二 戦争の本質
- 三 政治と戦争・戦争指導
- 四 政治の手段としての戦争
- 五 戦争の獨目的性質と政治の本質
- 六 歴史上における戦争の形態
- 七 戦争の近代的形態
- 八 ルーデンドルフのクラウゼヴィッツ批判
- 九 總帥論 ルーデンドルフとクラウゼヴィッツ
- 一〇 現代戦争の本質 わたくしの現代戦争観
- 一一 結論 クラウゼヴィッツとルーデンドルフ

一 國家と國家との交渉・關係

戦争とは何であるかの問題は、しばしば論争されるところである。アルツイン・ジョンソンは戦争を定義して、次のやうにいつてゐる。

「戦争といふ言葉は普通に、人種・部族・國家またはそれより狭小な地理的單位、宗教的または政治的黨派、經濟的階級のごとき有機的社會と考へられる人口集團間の武装闘争に適用せられる。法律的に見て、完全に、無制限な主權を享有する國家間の武装闘争が、近代思想においては、典型的な戦争として、取扱はれてゐる。かくのごとき國家内部における州・地方・宗教團體・政黨・經濟的階級間の武装闘争はその原初的狀態において、平和の守護者であり、保護者である主權國に對する蜂起または反亂と定義される。而して、現實的または可能的な一勢力が蜂起して持續し、國家の全領域または一部分において、充分に國家の權威に挑戦し得るに至つたときは、その争鬭は内亂といはれる。」(Alvin Johnson, War. Encyclopaedia of the Social Sciences. vol. 15.)

この定義は、社會的集團における鬭争の現象形態を、よく説明してゐる。社會的集團の内のあるものの武力行動がある場合は、蜂起といはれ、ある場合には、内亂といはれることは、それが戦争でない證據である。同じ武力的行動であつても、動物に對する場合は、狩獵であり、數人間の場合には、喧嘩であり、殺傷である。それは、決して戦争の名をもつて呼ばれることがない。それが國家の行動でないからだ。國家の行動として、考へられるものは、獨立の主權を持つ國家の場合である。主權の確立してゐる國家とは、その政治において、統一的組織を持つものである。かかる統一的組織を持つがゆえに、國家はその意志を、これを構成する人民一般に強制することが出来る。人民の主權に對する服従を強制することが出来る。それは國家意志に従ふことだ。國家の側からいへば、國家の意

志を貫徹することである。

しかるに、かかる國家の意志は、單に、その主權の及ぶ範圍内においてのみ、表現されるのではない。それは、他の獨立國家に對しても行はれる。一國の人民に對する國家意志の貫徹は、法の力または警察力をもつて、強制し得るのであるが、他の獨立國家に對しては、かかる強制の組織は存在しない。そこには、まづ外交による方法が考へられる。口頭または文書による外交的交渉である。しかるに、相手の國家が、この交渉に應じないやうな場合には、他の手段を採るより外に方法がない。それには、三つの方法がある。

第一に、相手國家に對する宣傳である。宣傳説得によつて、その國家の有識者または権力者を動かすことである。第二には、平和的實力の示威または、行使によつて、相手方を動かすことだ。軍備を擴大し、相手國を假想敵國として演習し、準備することによつて、相手の國家に戦争の恐怖を與へることである。また經濟的關係の利用による場合もある。兩國の關係が經濟的に密接であるやうな場合、その關係の制限または斷絶を暗示し、または具體化する事による壓迫の方法である。一國が他國に對して、經濟的依存關係にある場合、多くの手段が採られる。輸出入の制限または禁止、自國に存在する他國資産の凍結のやうな政策が、これである。

第三には、戦争である。武力的實力の行使である。

さういふ説得、實力壓迫、武力行使のいづれの場合においても、それは一つの國家意志を他の國家に對して、實現しようとする手段である。宣傳または交渉による説得のときは、極めて地味のものである。しかし、それが晴の舞臺において行はれるとき、決して、地味ではない。チェッコ・スロヴァキアのズデーテン問題に關するミュンヒェン會議のときものは、戦争が否かの瀬戸際まで行つたことと、ヨーロッパの指導的政治家ヒットラー・ムン

ソリーニ・チェンバレン・ダラヂェなどの大物が、その舞臺に登つたことによつて、世界の注目を惹いてゐる。ルーズヴェルト・チャーチルの大西洋上會議のときも、一の説得の手段であつたであらうが、派手な舞臺装置であつた。日米關係の一つの産物として、アメリカ合衆國の日本に對する輸出制限および禁止政策（昭和十五年七月以降）その後（昭和十六年七月二十六日）に行はれた在米資産凍結政策のときは、經濟的實力行使として、最も派手なものである。それは、既に武力的抑壓の一步手前のものである。かかる緊迫的情勢を打開するために、ルーズヴェルト大統領に送られた近衛メッセージなるものの正體は不明であるが、外交的手段としては、著しく兩國民と世界の注目を惹いたものである。

かくのごとき説得的並に實力的手段は、戦争のやうに、直接人命または物財に對する損害を發生せしめないことを特徴とする。經濟的壓迫のときは、一國の生産力を減縮せしめるやうな効果を持つこともあり、一國全體としてみると、その効果は重大であるが、餘程經濟の實情に通じてゐるものでないと、それを認識することは困難である。それは、その効果が間接的だからである。

二 戦争の本質

戦争は、これらの平和的手段に對して、武力的實力行使である。その効果は、直接的である。クラウゼヴィッツ將軍は、戦争を決闘に對比してゐる。

「戦争の基本的要素とは二者間の鬪争、即ち決闘である。戦争とは、畢竟するに決闘の擴大されたものに外ならない。即ちわれわれは、個々の決闘が無數に集り、それが一の統一ある全體をなしたものが戦争であると考へようとするものであるが、その場合二人の決闘者を想ひ浮べるのが便利である。決闘者は、何れも互に物理的な實

力を用ゐて、相手を屈服せしめ、もつて、自己の意志を貫かうとする。その當面の目的は、敵手を撃ち倒し、それによつて、それ以上の如何なる抵抗をもなす能はざらしめるにある。」戦争論第一篇(岩波文庫版)

戦争は、クラウゼウィッツによると、「敵を屈服せしめて、自己の意志を實現せんがために用ゐられる實力行爲である。」この實力行爲は、「手段であつて、敵にわれわれの意志を押しつけることが目的である。」(同上)しかしながら戦争の決闘的性質から戦争とスポーツとを混同することは許されない。「戦争は、決して呑氣な遊戯ではない。單に冒險僥倖をもつて快とするものではない。徒に興奮の餘りなされ得るものではない。戦争は眞面目な目的に對する眞面目な手段である。よし、それには僥倖の色彩が伴ひ、激情・勇氣・空想・熱狂等の要素が強烈であるとしても、それらは、戦争の手段に伴ふ諸特色に過ぎない。」(上卷七五頁)かくのごとくして、クラウゼウィッツ將軍は、戦争の手段的性質を強調する。戦争が單に、相手方を實力的に屈服するのみでなく、それは目的のために屈服せしめるのである。その目的は、政治に由來するものであるといふのが、クラウゼウィッツの主張である。

クラウゼウィッツは、こゝに政治なる概念を持ち來るのである。即ち戦争は政治を動機とし、政治を遂行するための手段であると考へられてゐる。

「共同社會の戦争、即ち全國民間の戦争、就中開明國民のそれは、必ず政治上の状態に胚胎し、政治的動機によつてのみ喚起される。故に戦争は一の政治的行爲である。處でもし戦争が、先に吾々が、その純概念的性質から演繹しなければならなかつた如く、實力の完全なる、阻害されることなき、絶對的發現であると假定すれば、よしんば始めは、政治によつて惹起されたものにせよ、その一度び起るや、直ちにそれは政治より完全に獨立したものとて、これに代り、これを押し追ひ、ひたすらに、その獨自の法則にのみ従ふに到るであらう。これ恰も

一度び導火された地雷が、必ず豫定せられた方面を守つて、他に逸ることなきに似てゐる。これまで政治と戦争との間の調和が失はれた結果、理論上、兩者を區別する必要が起つた場合には、人々は實際斯様に考へるを常としてゐる。だが事實はさうでない。かくの如き考へ方は、根本的に誤つてゐる。現實世界の戦争は、先に述べたが如く、決して一時に爆發して了ふ様な絶對物ではない。それは様々の力の作用である。それらの力たるや、互に完全にその種類を異にするのみではなく、又その發展の度合も一樣ではない。或る時は惰力と摩擦によつて與へられる抵抗力を打ち破る迄に膨脹するかと思へば、次には萎靡して何の作用も及ぼさなかつた風である。されば戦争は、いはゞ、實力の脈動と、でもいつたらよからう。それは、ある時は大なり小なりの激烈さを示すかと思へば、次には遅かれ早かれ、必ず緊張の弛緩と力の疲弊とが之に伴ふ。

所で今戦争が政治的目的より出發したものとすれば、戦争を惹起せしめた此の最初の動機が、又戦争の指導に對しても、最も重要な働きを及ぼすべきはいふ迄もない。とはいへ政治的目的は、決して專制的立法者ではない、それは第一に考慮されねばならない所の要素である。かくて政治は全戦争行爲に貫通し、戦争に於て爆發する力の性質が許す限り、之に不斷の影響を及ぼすものである。」(上卷七五―七七頁)

かくの如く論じ來つて、クラウゼウィッツは、戦争の本質を次のやうに定義してゐる。
「こゝに於てか、吾々は知る、戦争が單に一の政治的行爲であるのみならず、又實に一の政治的手段たり、政治的對外關係の一の繼續たることを。然り、それは他の手段を以てする、それが實行に外ならないのである。」(下卷五五〇頁)

クラウゼヴィッツは、戦争の本質を以上のごとく規定してゐるが、他の言葉をもつていへば「戦争は政治的交通の手段に過ぎず、それ故に、決して獨立なる力ではない。」(下巻 五〇一頁)彼は、この命題を次のやうに説明してゐる。

「勿論戦争が諸政府及び諸國民の政治的關係によつてのみ惹起されるといふ事は、誰もが知つてゐる事である。然し人は普通この事を次のやうに考へてゐる。曰く、戦争の勃發とともに、かの政治的關係は中絶し、獨特の法則に従ふ所の全然異つた状態が成立するのである。」

然し、われわれは之に對して、次の如く主張する。曰く戦争は他の手段を併せ用ひる所の政治的關係の繼續に過ぎないと。此處に吾々は他の「手段を併せ用ひる所の」といふ句を用ひたが、それによつて吾々は次の事を示さんと欲したものである。それは、此の政治的關係なるものは、戦争によつて中絶してしまふもので、全然異つた他のものに變つてしまふものでもない事、否、それが用ひる所の手段が何であれ、その本質の不變である事、繼起する軍事上の諸事件を連載してゐる所の主要なる流れは、畢竟するに、戦争から媾和に迄走つてゐる所の政治の姿に過ぎないといふ事これである。又それより以外に考へやうがあらうか。一體外交的文書の往復が途絶えたからといつて、諸國民諸政府の政治的諸關係も、亦途絶えてしまふものであらうか。戦争とは、要するに政治的諸關係の内容を、他の表現方法を以て發表したに過ぎないのではないか。成程、そこには特別の文法はある。然し特別の論理はないのだ。」クラウゼヴィッツ 戦争論 下巻 五〇一―五〇二頁)

わたくしは嘗て、基本社會と相互作用の問題を論じて、人間の關係を相爲・相共・併存・對立の四形態とし、對立の關係をも結合構成的相互作用の範疇に入れ、これを除外せんとした學者に反對したことがある。(拙著 社會學序説

第八章 参照)この場合、對立の相互作用として、最も激烈な戦争について、次のやうにいつた。

「一基本社會と他の基本社會との戦争は、一の對立の状態であつて、從來の兩者の關係の改廢を行ふための行爲に外ならぬ。即ち兩者の關係が併存關係にありとすれば、これに働きかけて相互作用關係に引き入れるための行爲に外ならぬ。又從屬支配の關係にあるものは、對等の關係を作り出さんが爲めの、又はその逆の關係を作り出さんが爲めの一特殊的結合状態に他ならぬのである。……」

この社會學序説執筆當時、わたくしは、いまだ、クラウゼヴィッツを読んでゐなかつたのであるが、筆者の意味するところは、クラウゼヴィッツの政治概念の導入と同じ意味のものであつた。クラウゼヴィッツは、兩戰國國の關係が外交文書の斷絶によつて、消滅するのではなく、戦争といふ他の手段によつて、兩國の關係の繼續せられてゐることを主張するのであつて、筆者が戦争を一の結合構成的作用に入れたのと同じ立場であると考へられる。ただ筆者の場合には、政治を一般的結合構成的作用といふ廣義のものの中に包含せしめたのである。

クラウゼヴィッツの戦争本質論は、戦争の社會現象としての本質を把握してゐる。それは、戦争なる現象を他の社會現象全體との游離的狀態において、また戦争を本質的に他の社會現象と異なる孤獨的な概念として取扱ないところに、その正確性がある。

クラウゼヴィッツは、戦争の他の社會的現象に對する關聯性と同時に、その歴史性を認識してゐる。「社會的狀態及びその諸事情こそ、戦争の眞の地盤であつて、戦争は、これによつて條件づけられ、制限せられ、緩和される。けれどもこれらの事柄は、戦争そのものの屬性ではなくて、戦争そのものにとつては、それは一の與へられた事實たるに過ぎない。」(戦争論 上巻)といつてゐるし、また戦争形態の史的發展を研究して(戦争論 下巻)次のごとく

いつてもある。「各時代の戦争には夫々独自の性質、之を制限する独自の条件があり、独自の制約を受けてゐた次第を明瞭ならしめんとするにあつた。従つて又結局晚かれ早かれ、普遍的哲學的原理に基いて戦争理論を加工するべき義務があるとしても、各時代には夫々独自の戦争理論があるべき筈である。即ち各時代の出来事は常にその時代の特異なる性質との關係において、判断されねばならぬ。あらゆる瑣末事を戦々競々として研究するのはなく、大局を鋭く把握することによつて、各時代の特異性を看破せる者のみが、その時代の將帥を理解し、評價することが出来るのである。」(戦争論 下巻 五〇三頁)

三 政治と戦争・戦争指導

クラウゼヴィッツの戦争理論において、最も重要な點は、戦争と政治との關係である。彼によれば、戦争は政治の手段である。従つて「戦争が政治に所屬するとすれば、それは當然政治の特質によつて特徴づけられる。政治が大規模で、その威力が大であれば、戦争もまたさうなる。その程度は際限がなく、かくて遂に戦争が、その絶對的な姿にまで達することが可能である。」(下巻五〇三頁)

この點は、クラウゼヴィッツが力説するところであり、彼の理論の根本を形成するものだ。彼は繰り返していふ。「戦争は政治の手段である。戦争は必然的に政治の特徴を帯びねばならぬ。その規模は政治のそれに對應しなければならぬ。それゆゑに戦争の實力は根本において、政治それ自體である。その場合政治はペンに代へるに劍をもつてするが、しかし、それがために、その固有の法則に従つて思考することを中止するものではない。」(下巻五二二頁)。

戦争が政治によつて、決定されるといふのは、その根本においてである。「騎哨の配置や斥候の派遣までもが、政

治的顧慮によつて規定されるわけではない。しかし、全戦争、一戦役の作戦計畫、しばしばまた一會戰のそれを作成するに當つてさへも、この要素の及ぼす影響は、それだけしばしば決定的なものとなるのである。」(下巻五〇四頁)

かくのごとき政治と戦争との關係については、政治的着眼點と軍事的着眼點の問題が提起される。この場合においても、政治的着眼點の根本的性質をクラウゼヴィッツは主張する。

「戦争といふものは、單なる敵愾心の發露ではなく、政治それ自體の表現に過ぎないのである。然りとすれば、政治的着眼點を軍事的着眼點の下位に置くのは、不條理であるといはねばならぬ。蓋し、政治が戦争を生んだのであるからだ。政治が主宰者で、戦争は手段に過ぎない、その逆では決してない。然らば、軍事的着眼點を政治的着眼點の下位に置くことのみが、可能なる唯一の方法である。」(下巻五〇五—六頁)

政治と戦争とに關するクラウゼヴィッツのかかる見解は、當然戦争指導(Kriegsführung)の問題に發展しなければならぬ。戦争指導とは用兵のことであるが、戦争においては、個々の戰團の技術と、それを戦争目的に結合せしめて、按配する指導とを必要とする。そこに、戰術と戰略との區別を必要とする。戰團の技術が戰術であり、幾多の戰團を戦争目的のために指導することが、戰略である。クラウゼヴィッツはいふ。

「用兵(戦争指導)とは争鬪を按配し遂行することをいふ。もし、この争鬪にして一個の獨立なる行動に過ぎないならば、吾々はこれ以上に用兵に就いて區分する必要はないであらう。しかるに、争鬪は、それ自身獨立性を有する個別な行動の若干數より成るものである。これらの個別的な行動とは、吾々が第一篇において、戰團と名づけた所のものであり、それが争鬪の新たな單位をなす。こゝにおいて、これらの個々の戰團を、それ自身におい

て、照梅し、遂行すること、これらの戦闘を戦争の目的と結びつけることとは、全く相異なる活動となる。前者は即ち戦術であり、後者は即ち戦略である。

戦術とは、一個の戦闘における戦闘力使用の學問であり、戦略とは、幾多の戦闘を戦争の目的のために、使用する學問である。(上巻一五九—一六〇頁)

戦争は、個別の戦闘として理解すべきではなく、一つの有機的全體と解されねばならない。即ち、凡そある戦争を理解するためには、まづ第一に、それを生んだ政治上の諸力及び諸關係との關聯において、その特質およびその主要輪廓を推測しなければならぬ。屢々、否大抵の場合、戦争は一の有機的全體と看做されねばならぬ。吾々は、その肢節をバラバラに切り離すことは出来ぬ、即ち個々の活動は全體と合流し、この全體の觀念によつて規定されてゐなければならぬ。こゝにおいて、戦争を指導し、その重要方針を規定すべき最高の立脚點が、政治のそれ以外の如何なるものでもあり得ないといふ事は、吾々にとつて完全に確實となり、明瞭となる。(下巻五〇六頁)

かくのごとき戦略的見地については、政治こそ、その原動力でなければならぬといふのが、クラウゼウィッツの主張である。政治にして軍事的諸條件を正しく評價し得るものとすれば、戦争の目標に達するために、最も適應した戦争の方針や事件を規定する事は、全然政治の仕事であり、又政治のみの仕事である。(下巻五〇七頁) またいふ。

「凡て一戦争にとつて必要なる主要諸作戦は、すべて政治的諸關係に對する洞察なくして行はれ得ない。世人は、しばしば政治が、戦争の遂行に有害なる影響を及ぼすといつて非難してゐるがそれは全く見當ちがひな考へ方である。かかる場合に非難しなければならぬのは、この影響ではなくて、實は政治それ自身なのだ。政治が正しけ

れば、即ちそれがその目標に適合してゐれば、それは戦争に影響して有利なる結果を齎さざるを得ないのだ。もし、この影響が目標から逸れたものであれば、その原因は専ら間違つた政治の中に求められるべきである。」(下巻 五〇七—五〇八頁)

政治はかくのごとき地位を持つてゐるにも拘らず、軍事に對する理解の缺如のために、戦争指導を誤ることがある。従つて、「政治の運用のためには、軍事についてのある程度の理解が絶対に必要である。」(下巻五〇八頁)しかしながら、政治當局に對して要求せらるゝことは、「眼界廣く、頭腦俊敏にして、性格鞏固なること、これこそが宰相たる者の有せねばならぬ主要特質である。」(下巻五〇八頁)かかる性格を有する者にとつては、「軍事に對する洞察などは、何らかの方法でこれを補ふ事が可能である。」(五〇八—九頁)

かかる見地に立つクラウゼウィッツは、戦争指導の責任は、軍事當局ではなく、政務當局にあるといふ斷定に達してゐる。彼はいふ。

「この見解より推せば、特に大軍事的事件または、それに對する作戦は、純粹に軍事的なる觀點からのみ評價すべきであると考へるのは、不必要である許りでなく、有害でさへある。實際戦争計畫を樹てるに當つて、特に軍人に諮問し、之をして内閣の行ふべき事に就き純粹に軍事的な批評をなさしめんとするが如きは、事理を誤つたものであるといはねばならぬ。然し、更に一層不條理なのは、世の學者と言はれる人々が、すべて既存の戦争手段の使用は、將帥の自由に任ざるべきであると要求してゐることである。蓋し彼等によれば、かくして實施されたる手段に應じて、戦争又は戦後に對して、純粹に軍事的な作戦を樹てしめねばならぬといふものだ。今日の戦争は、非常に複雑となり完全なものとなつて來たが、それにも不拘、戦争の主要なる方針は、常に内閣によりて、專問的

な言葉を用ひれば、軍事當局ではなく、政務當局によつて規定されて来たといふ事は、一般的経験に徴しても、明かである。(下巻五〇七頁)

クラウゼウィッツの政治根源論に對して、最も大きな反響を加へたものは、ルーデンドルフであらう。ルーデンドルフ將軍の「全體戦争論」については、後段に詳論する筈であるが、將軍は、現代の戦争は民族存在の最高意志の表現であると規定し、それに對して、一切のものが奉仕しなければならぬと主張する。政治が戦争を指導するのではなく、戦争こそ、政治を指導するものであるといふのである。

かかるクラウゼウィッツとルーデンドルフの見解の相違は、全く對峙的である。その理由は、ナポレオン時代の戦争と現代の戦争との本質的差異によるものであることは、明瞭であり、更に現代の戦争の本質を理解するとき、兩者の理論的對立を、綜合としての一つの新しい理論に、有機的に組織し得るのではないかと考へられる。わたくしの小さな意圖も、その點を目指してゐる。

クラウゼウィッツの戦争における政治至上論とルーデンドルフの戦争に對する政治從屬論との融合は、決して容易ではないが、現在の實狀として、軍人をして戦術を、政治家をして戦略をといふクラウゼウィッツの理論は、直接適用すべきものではない。殊に、近代自由主義の下において、軍事的知識が輕視され、クラウゼヴィッツのいふ「軍事についてのある程度の理解」をも、持つてゐない政治家の多い場合、それは絶対に危険であるといはねばならない。而して、わが國のごときも、その政治家の資質において、かかる理解を充分に持つてゐるとは考へられぬ。事實の上においても、政戦兩略の一致のためには、現在大本營連絡會議なるものが運用されてゐる。この點は統帥と政治との關係の最も微妙なるわが國においては、クラウゼウィッツの戦争の政治理論をも、またルーデンドルフ

の將帥獨裁論とも稱すべきものをも、採用し得ないであらうと考へられる。そこに、わが國の特殊の理論が存在しなければならぬ筈である。

四 政治の手段としての戦争

戦争は、決闘の發展した性質を持つてゐることは、既にクラウゼウィッツが、その戦争本質論の頭初にいつたことである。従つて、その行動においては、常に積極的である。それは、勝利か敗北かの問題であると同時に生か死かの問題である。戦争が眞面目の目的に對する眞面目の手段とせられる理由は、こゝにある。従つて、戦闘の方法も、戦闘自體の發展において、積極的ならざるを得ない。

「敵の完全なる討滅を目標として、設定し得る程の者ならば、容易に防禦に避難を求め様な事をしないであらうといふことは事實だ。蓋し防禦の直接の目標は、既得物の保存以上には出でないからである。しかし、われわれは、あらゆる積極的原理を缺くところの防禦などといふことは、戦術上においても、戦略上においても、あり得べからざる不條理の思想であるといふことを、飽くまでも固執し、防禦者としての利益如何なるをも充分に享受した後は、力の許す限り、直ちに攻撃に移る事に努めるであらうといふことを、常に想起しなければならぬ。然りとすれば、この攻撃が持ち得る所の目標もまた恐らくは、やはり敵の討滅といふことであると思ねばならぬ。従つてその大小を問はず、それこそが防禦の本來の目標であると看做さるべきである。」(下巻四九二頁)

かくのごとき戦闘の本質は、また戦闘の集中性を要求する。それは戦闘の徹底性を貫徹するものである。

「勝利者は常に全體の重心を目指して突進すべく、全體の副次的な部分に向つて、動作を集中する様なことがあつてはならぬ。精神上物質上優勢の地位にある時と雖も、單に敵の一州を占領するが如き小事にあくそくし、こ

の占領には危険が少いからといふので、大功を樹てる様なことがあつてはならぬ。常に怠る事なく敵の勢力の核心を求めよ、全力をこれに集中し、全體を獲得せんことを期せよ、かくしてのみ、敵を實際に叩き伏せる事が出来るのである。」(下巻四八二頁)

かくのごときが、戦闘の本質であり、戦争が「絶對的な姿」に到達した第十九世紀初葉においては、この性質は更に激烈を極めて現はれてゐる。(戦争論第八篇第三章)それを戦争の「独自の法則」といふことが出来よう。(上巻第一篇七六頁)それは、ナポレオン・ボナパルトにおいて、十分に發展した「打倒戦術」(Niederwerfungsstrategie)である。それが、戦闘の窮極の本質である。

しかしながら、戦争は政治によつて規定される。元來、政治なるものは、政治家の力的關係によつて左右され、その運用は、その力の取引ともいふべきものである。従つて、政治は、戦争の本然性のやうに、生死の瀬戸際にまで到ることが、甚だ多いとはいはれ得ない。掛引の度合は、戦争におけるよりも、一般の政治において、顯著である。而して古代および中世の政治は、人民全體の政治ではなくして、その中の特權者のそれである。この政治の本質に従つて、戦争を遂行せらるゝに至つた。

「軍隊は國庫によつて扶養されてゐたのであるが、君主は國庫をもつて、半ば自分の私有財産であるかのごとく看做し、さうでないまでも、これを政府の財産であるかのごとく看做し、國民に所屬するものとは考へなかつたのである。又他の諸國家との關係は、若干の商業問題を除くの外は、その多くは國庫または政府の利害にのみ關係し、國民の利害とは、關係がなかつた。少くとも、何處でも、その様に考へられてゐた。かくて内閣は自ら大財産の所有者兼管理者を以て任じ、常にその増殖に努めてゐたが、納税者たる國民は、この増殖によつて、特別

なる利益に與り得るわけではない。韃靼人の遠征に際しては、全人民が戦争に参加し、古代の共和國及び中世紀においては、戦争は本來正式の公民のみの仕事とされてゐたといへ、しかもなほ多數の人民が、これに参加してゐたが、十八世紀にいたるや、人民は今や直接には何等の價値をも有せず、唯その國民的素質の優劣によつて戦争に對して、間接の影響を及ぼすに過ぎないこととなつたのである。か様にして、戦争は、政府が人民から離隔し、政府そのものをもつて、國家と看做すに到りて以來、正にそれに対応して、單に政府のみの仕事となり、政府は、その公金を支出し、自國および隣國の浮浪の徒を驅り集めて、之を遂行したのであつた。その結果、各政府の用ひる事の出来た手段は、かなりに限定され、兩國は、互にその對敵の手段の範圍や持久力を容易く看破することが出来た。

こゝにおいて、戦争は、その最も危険なる方面、即ち無限界的な努力および、これと結びついてゐる様々な可能性の充分な測定し難き事等の性質を失ふ事となつた。

當時にあつては、その敵國の財政状態・資源・信用等は、略々之を知る事が出来た。また、その兵數に就いても同様である。戦争の間際になつて、俄に兵力を増大させるといふ事は、到底出来なかつた。かくのごとく、敵の兵力の限界を測定することが出来たから、全滅の非運に陥るがごとき危険は、豫め之を避けることが可能であつたし、又自國の兵力の限界を感じるによつて、力に相應した中庸を得た目標を選ぶことが出来た。…假令君主といへども、軍隊に用ひるに當つては慎重を旨としなければならなかつた。

こゝにおいて、戦争は、その本質において、全く時間と偶然によつて運命が決まるカルタ遊びにも比せらるべきものとなつた。またその意義よりいへば、それは、幾分強硬なる外交、言ひ換へれば、やゝ頑強なる態度を

もつて行はれる樽俎折衝の類に過ぎず、その場合、會戦や攻城が、外交通牒に代つただけのことであつた。當時にあつては、最も野心に燃えたと雖も、媾和締結の際の擔保として、些少の利益を獲得する以上の事は求めなかつた。(下巻四六八―四七〇頁)

クラウゼウィッツの叙述は、第十八世紀を中心とするものであるが、この時代においては、戦争は全く政治の手段として、手段としてのみの性質を具有してゐたに過ぎない。従つて、それは性質に従つてのみ、現象として現はれたのである。

「政治は、戦争を手段として、用ひる事により、戦争の性質から當然出來するあらゆる結果を回避し、終局的な可能性には頓著せず、手近な蓋然性のみを執着する。その結果、全事業は著しく不確實なるものとなり、いはゞ遊戲に類するものとなるが、こゝにおいて、各國政府は、専らこの遊戲における敏巧と明察力とにおいて敵に優るを以て、悦びとし誇りとするに到つた。

かくのごとくして、あらゆるものを破壊せざんば止まない猛烈無比をもつて本領とするところの戦争も、政治の手に歸するや、單なる一手段と化してしまふ。會戦は恰も恐るべき巨劍のごときものである。兩手をもつて握りしめ、全身をこめて振り上げ、二度とやり直しをしない覺悟で猛然と之を打ち下さねばならぬ。所が、それが、政治の手に歸するや、忽ち輕便自在の細劍となり、時には又刃のない試合用の劍とさへなり、突き・伴撃・ひつばづし等様々の妙手をもつて、敵手と技を争ふ手段と化してしまふ。(下巻五〇二―五〇三頁)

戦争においては、敵國の勢力を察知することは、ある程度までなし得るところである。しかしながら、その全體を窺知することは不可能である。「此の場合諸關係が甚だ多種多様にして、且つその境界の不明確なる結果、將帥の

視野の中に入り來る要因は甚だ多數であり、加之これらの要因の大部分は、唯推測によつてのみ知られ得べきものである。こゝにおいて、若し將帥にして常に眞理を看破する素晴らしい眼力をもつて、これらの一切を整理するにあらざれば、諸々の觀察や考慮が紛糾錯雜し、如何なる判斷も下すに由なきに到るであらう。この意味において、ボナパルトの左の言葉は、實に至言といふべきである。曰く「將帥の下すべき判斷は、ニュートンやオイレルの頭腦をまつて、始めて解決さるべき困難なる數字的問題に似てゐる」と。(上巻一三三―一三四頁)従つて、優秀な將帥としては、「建設的なるよりは、寧ろ反省的なる人物、一面的にある方向を追求するていの人物ではなくて、寧ろ全體を概括する能力を有してゐる人物、熱烈なる腦髓の所有者ではなく、寧ろ冷靜なる腦髓の所有者である。」(上巻一三五頁)それは、戦争が「推測の世界」であるからであり、(上巻一〇八頁)また「蓋然と偶然との交錯」であり、(上巻八〇頁)「暗礁の多い未知の海に似てゐる」からである。(上巻一四八頁)

五 戦争の獨自的性質と政治の本質

紛糾錯雜は、戦争の過程において現はれる現象であるが、そのことのために、戦争の本質が埋没せらるゝものではない。

「戦争はその目的を達するに遲速の差ありとはいへ、常に必ず一定の期間繼續し、その間に或は右へ或は左へ方向の變化が與へられる余地が残されてゐる。即ち戦争は、之を嚮導すべき理智によつて左右されざるを得ないわけである。所で今戦争が政治的目的より出發したるものなりとすれば、戦争を惹起せしめた此の最初の動機が、また戦争の指導に對しても、最も重要な働きを及ぼすべきはいふまでもない。とはいへ、それだからといつて、政治的目的は、決して專制的な立法者ではない。それは手段の性質に従はねばならぬ。しばしばそのために全

然その性質を案せしめられることさへある。だが、何れにせよ、それは第一に考慮されねばならない所の要素である。かくて政治は、全軍事行動に貫通し、戦争において爆發する力の性質が許す限り、之に不斷の影響を及ぼすのである。(上巻七六一七七頁)

戦争は、政治に歸し、政治上の目的を達する手段として、遂行されるものである。しかしながら、戦争は、平時における政治上の他の手段と異なるものを持つてゐる。それは、戦争の獨自的性質である。それは、戦争が「實力の完全なる阻害されることなき絶對的發現であると假定すれば、よしんば、始めは、政治によつて惹起されたものなるにせよ、その一度起るや、直ちにそれは政治より完全に獨立したるものとして、これに代り、これを押し退け、ひたすらに、その獨自の法則にのみ従ふに到るであらう。これ恰も一度び導火された地雷が、必ず豫定せられた方向を守つて他に逸れることなきに似てゐる。」(上巻七六頁)

しかしながら、戦争を規定するものは、政治であり、戦争の地盤たるものは社會状態および、その諸事情である。「開明國民の戦争と未開國民の戦争とを比較すると、その慘虐性と破壊性の程度において、後者ははるかに前者に勝つてゐるが、これは、國家の内部および國家相互間の社會的狀態に起因してゐるのである。社會的狀態およびその諸事情こそ、戦争の眞の地盤であつて、戦争は、これによつて條件づけられ、制限せられ、緩和される。けれども、それらの事柄は、戦争そのものの屬性ではなくて、戦争そのものにとつては、それは一の與へられた事實たるに過ぎない。」(上巻五三頁)

クラウゼヴィッツは、政治と戦争の關係を詳細にしばしば論じてゐるが、政治そのものの性質について、論ずることは、寧ろ少いといはねばならない。それは、戦争理論を攻究するものとして、そこに全力を注ぐことを得ない

のは、當然のことだからである。しかしながら、彼は政治を如何なる意義に解してゐるか。彼はいふ。

「政治といふものは、國內行政上のあらゆる利害、又個人生活のそれをも、その他哲學的思辨によつて考へ得られる種々なる利害を、一にまとめ、これが調和をはかるものであるといふ事を、前提として議論を始める。といふのは、元來政治は、それ自體としては何らの價值あるものではなく、右の諸利害の管理人として諸外國に對峙するものに過ぎないからである。尤も、政治が誤つた方向を持ち、野心・私利・私害・政府當局者の己惚等に奉仕することもあり得るが、それは、こゝに問題とすべきものではない。こゝでは、唯政治をもつて、社會のあらゆる利害の總代表者とみなし得るのみ。」(下巻五〇五頁)

クラウゼヴィッツは、政治をかくのごとく解してゐる。それは、國家といふ文字をもつて置き換へても差支ない程度のものである。この解釋は、彼が戦争の地盤としての「社會状態およびその諸事情」を擧げ、これに對比すべきものである。しかしながら、彼の「戦争論」を精讀し、それによつて、戦争と政治との本質的關係を論じたところにおいては、政治は、多少以上の規定づけよりも、狭少に解してゐるもののごとくである。それは、「政治」といふ言葉に對して何等の解釋をも與へてゐない場合である。たゞ、戦争そのものの關聯の廣さを十分認識するとき、クラウゼヴィッツの政治といふ意味も可成廣いものと考へられるが、その點は明瞭にされてゐない。従つて、彼が、政治を定義した唯一つの場合である以上の引用文を、その解釋とするの外はないのである。

こゝで、問題となるのは、戦争の地盤としての社會状態と政治の關係である。このことについては、クラウゼヴィッツは、何等明瞭な解答を與へてゐない。しかしながら、社會状態およびその諸事情を、戦争の地盤であると解することは、戦争と政治との關係に照して、それはまた政治の地盤なりといふことが出来るであらう。この「社會状態

およびその諸事情」の総合的規制機構としての政治を、またクラウゼウィッツは考へてゐるものごとくである。「社會のあらゆる利害の代表者」といふ思想が、そこにある。クラウゼウィッツは、社會状態といふものは、人間生活に必然的に發生すべきものであり、その調和者としての政治を考へてゐるまでである。

彼は、それ以上に進んでゐない。戦争における技術の役割の大なることを認めてゐるが、その技術と經濟の關係に従つて、その戦争との關係にまで及ぶものではない。

クラウゼウィッツは戦争の經濟的説明をしようといふのではない。十四世紀の始め、火薬がアラビヤ人から西ヨーロッパ人に傳へられ、戦争を全く一變せしめた。この火薬や火器(銃砲)の導入は、一の産業的、したがつて經濟的の進歩である。産業は依然産業であつて、それが物の生産に向けられるか、その破壊に向けられるかを問はない。しかも火器の導入は、たゞに戦争そのものに革命的影響を及ぼしたのみでなく、政治上の支配や隷屬の關係の上にも作用した。火薬や火器を得るには、産業と貨幣が必要であり、そして、これら兩者を有するものは、都市の商工金融業者であつた。だから火器は、そもそも始めから、都市やまた都市を支柱とする新興君主政治やの封建貴族に對する武器であつた。今までは、近づき得なかつた貴族の石の城壁は、近代工業による加農砲の前に倒れ、近代工業の騎銃の彈丸は騎士の甲冑を射貫いた。鎧に身を固めた貴族の騎兵隊と共に貴族の支配もまた崩壊し、商工階級の發展とともに、歩兵と砲兵とが、ますます決定的な兵種となつた。そして、大砲のお蔭で、軍需品製造業は、全く産業的なる一の新たな部門たる工兵隊を作らねばならなかつたといふやうな經濟的説明ではない。また運隊や艦隊ほど經濟的條件に依存するものはない。武備・編成・組織・戦略・兵法は、何よりもその時の生産段階や運輸状態に依存する。これらに革命的影響を與へたものは、天才的將軍の「悟性の自由なる創造」ではなくて、よりよき武器

の發明と兵卒材料の變化とであつたといふやうなことを主張しようとするものでもない。

さういふやうに、戦争が、戦争技術の發展に従つて、その形態を變化することは、クラウゼウィッツの認めるところである。しかし、彼の重點を置いた部分は、寧ろ政治形態の變遷である。政治を深く掘り下げて、そのよつて來るところは何かといふ問題は、クラウゼウィッツの問題としなかつたところである。第十九世紀初葉の戦争理論家として、クラウゼウィッツが、戦争の歴史性を承認し、その政治との本質的關聯を認識しただけで理論家としての任務を十分に果たしたのであつて、彼に戦争と經濟との直接の關聯性を考察しなかつた點を責めるのは、寧ろ酷に過ぎるであらう。それは、當時の戦争並に、ヨーロッパ大陸の事情によるであらう。ウエルナア・ゾムバートが、その「戦争と資本主義」や「近代資本主義」において指摘してゐるやうに、既に近代初期からの集團戦争において、武器・制服・食糧・軍艦などの大量生産が行はれ、その生産は資本主義としての特質を持ち、それが近代國家の成立發展と深い關係を持つてゐることは、史實として、これを認むべきであらう。しかしながら、第十九世紀にいたるまでの戦争は、經濟的意味において、一つの微發戦争經濟を營んでゐたといつてよいであらう。さういふ意味においては、戦争の經濟に對する影響は、なほ今日のやうに絶大なものであつたとみることが出来ない。クラウゼウィッツの戦争理論は、かかる時代のものだ。

六 歴史上における戦争の形態

クラウゼウィッツが、戦争の歴史的形態を確實に認識してゐることは、大きな戦争理論に對する貢獻である。彼は「各時代の戦争には、それぞれ独自の性質、これを制限する独自の條件があり、独自の制約を受け」てゐることを明瞭ならしめてゐる。従つて、クラウゼウィッツによれば、各時代には、それぞれ独自の戦争理論があるべき筈で

ある。「下巻四七七頁」しからは、戦争はいかなる形態において、発展したか。クラウゼヴィッツは、それを「戦争論」第八篇作戦計畫の中に(四六一—四七八頁)「歴史をごく大雑把に概観する」として、これを論じてゐる。彼はいふ。

「半開明的なりし韃靼民族、古代の諸共和国・中世紀の封建領主および商業都府、十八世紀の諸國王、最後に十九世紀の諸君主および諸國民は、何れも、獨特の仕方で行つてゐる。その手段やそれぞれについて異なるのである。」(下巻四六一頁)

A 韃靼人の戦争形態。

韃靼人は、民族として、新住地を求めて移動してゐる。それは全民族であり、全家族を包含してゐる。従つて、その数は莫大であり、いかなる軍隊もこれに及ぶものはない。彼等の目標的、敵の打倒または驅逐にある。もし、彼等が高度文化を持つてゐたならば、その前途に横はるあらゆるものを倒滅してしまつたであらう。

B 古代諸共和国の戦争形態。

古代共和国は、その国土面積が狭小であり、その軍隊の兵員に至つては、なほ小さい。それは人民の多数を占める賤民が、除外されてゐたことである。共和国の數も多數で、相互に均衡が保たれてゐて大仕掛の攻撃や侵略に對して、集團保證をなし得たからである。「そこで彼等の戦争は平坦なる国土の却掠と二三の都市の占領とに限られてゐた。」

この例外をなすものに二つある。ローマ帝國の軍事行動とアレクサンドル大帝のそれである。

ローマは、後代にいたつて、その例外をなしてゐる。始めは寡少の軍隊をもつて、除々に大をなしてゐるが、そ

れは同盟によることが多い。かくてイタリアの南部に勢力を擴大した後、實際の侵略戦争を開始した。その廣大な戦域における戦闘力を養ふには、國內の富で足りた。そして、大共和国を出現せしめたのである。

アレクサンドル大帝の戦争も古今獨歩である。彼の兵數は小であつたが、その質において秀てゐた。そして、彼はアジア諸國の腐朽せる建物を打倒して行つた。遂にインドに達したほどの廣大な戦争を遂行した。アレクサンドルにおいてこそ、君主自ら卓越した軍の編成者であり、指揮者であることを發見する。かかる性格においてのみ、疾風迅雷的戦争をなし得たのである。

C 中世時代の大小君主國の戦争形態。

封建君主は、いづれも封建的軍隊をもつて戦争を遂行した。封建的軍隊は、君臣關係によつて編成されてゐた。この君臣關係は、半ば法律上の義務によつて結ばれてをり、半ば自發的な同盟關係によつて結ばれてゐたが、全體として見れば、一の聯合關係であつた。武器と戦術とは、腕力と個人的格闘とを基礎としてゐながら、集團的運動には適してゐない。また戦争それ自體も、その目的は大抵磨微の範圍を出ず、敵を打倒することではない。即ち敵の家蓄群を奪取し、その城廓を焼き拂へば、再び歸國する程度の短期において行はれたのであつた。

D 大商業都府および小共和国の戦争形態。

これらは、いづれも傭兵を用ゐてゐた。それには莫大な費用を要し、従つて兵員は著しく制限されてゐた。またその實力はなほ更に貧弱であつた。かくのごとき軍隊の戦争行動は、勢ひ八百長的ならざるを得ない。萬事は懸引で解決されることとなり、戦争自體の持つてゐる實力の無限の發展の本質は失はれてしまつてゐる。

E 統一的領土國家の戦争形態。

封建制度の衰頹の上に建設された一層緊密な結合が統一的領土國家であり、その軍隊は身分上の服従關係から物質上の關係に變じ、次いで金錢的關係が漸次に大多數の關係を支配することとなり、封建的軍隊は給金を給與される軍隊となるに至つた。傭兵制度は、かかる變化への過渡を形成するものである。短期の契約で雇傭された兵士は、常設的な傭兵に變じ、國家の兵力は國庫の負擔をもつて設けられた軍隊によつて維持されることとなつた。この時代においては、ヨーロッパは多くの小國家が分裂してゐて、そのあるものは常に擾亂をこととしてゐる共和國であり、あるものは、統治力の著しく狹隘な不確實な小君主國であつた。かかる國家において、戦争がその本來の性格を發揮し得る政治を持つことは出来ない。

第十七世紀の末葉、即ちルイ十四世の時代は、われわれが第十八世紀において見出すとき常備軍の發達した時代である。この常備軍は、壯丁の募集と俸給制度とを基礎としてゐた。諸國家は、完全な統一體として完成せられ、政府は、その人民に賦役と物納とに代へるのに、貨幣による租税を支拂はしめることによつて、その全權力を國庫に集中せしめた。農業の急速な進歩と行政機關の完備とは、この權力をして、舊時代のそれに比して素晴く大なるものたらしめた。當時のフランスは約二十萬の常備軍を持つてゐた。

しかしながら、かかる國家規模の擴大・政府權力の増大化にも拘らず、國家の中樞を國庫に置き、ややもすれば、その國家の國庫と君主の金庫とが混同せらるゝ風習のあつた當時においては、諸國家の關係は、その多くは國家または政府の利害にのみ關係し、國民の利害とは、關係がなかつた。従つて、戦争は「政府のみの仕事」となり、「政府はその公金を支出し、自國および隣國の浮浪の徒を驅り集めて、これを遂行したのであつた。」その結果政府の用ゐる手段は、限定され、その實力は容易に察知された。従つて、戦争を、その本來の性質において發展せしめることが出来なかつた。

が出来なかつた。

F 戦争の新しい形態への先驅者。

統一的領土國家の戦争は、ややその規模が増大すると同時に、單に政府のみの仕事と化することによつて、發展することがなかつたが、この時代においても、戦争の新しい形態への先驅者を發見することが出来る。

それは、スウェーデンのグスタフ・アドルフ・フランスのシャルル十二世、プロイセンのフリードリッヒ大王である。クラウゼヴィッツは、これらの諸王を、「三人の新時代のアレクサンドル」と呼んでゐる。彼等はいづれも、兵數は寡弱であるが、素質において優秀な軍隊を指揮し、その支配する小國を變じて、大君主國を建設したものであつた。彼等は、戦争によつて、大膽な事業を成就しようとして計畫した限りにおいて、ナポレオン・ボナパルトの先驅者といふべきである。しかしながら、彼等は、中等程度の成功で満足しなればならなかつた。それは、當時のヨーロッパの政治的均衡によつてゐた。それに制限せられて、彼等は驚天動地の活動を試みることは出来なかつた。

七 戦争の近代的形態

G フランス革命並にナポレオン・ボナパルトの戦争形態。

戦争の形態は、フランス革命によつて二變した。フランス革命は、フランスの絶對的君主制を廢して、立憲共和制を生んだ。ここでは、政治は全人民の政治と宣言され、觀念された。このことは、フランス國民の間に、著しい國家意識を高揚せしめたのである。しかるに、ヨーロッパの封建的または絶對的國家は、かかる政治の動向を喜ばず、その打倒を目的として、戦争を宣した。しかるに、一七九三年において、ヨーロッパの舊勢力の夢想だになつた大兵力が發生した。「戦争は突如として、再び民衆の、しかも何れも自ら公民をもつて任じてゐる所の三千萬

の民衆の事業となつた。かくのごとく民衆が戦争に参加することとなつた結果、内閣や軍隊ではなく、實に全民衆が天祿の皿の上に、ドットと座り込むこととなつたのである。いまや、用ゐられる手段、捧げられ得る努力には、如何なる限界もなく、戦争それ自體を遂行せんがために、發揮し得られる剛力に對しては、如何なる力も、これに對抗することを得ず、こゝにおいて、敵にとつて、その危険實に無際限のものとなつた。しかしながら、かかる戦争の性質は、革命の諸將帥によつて、自覺せらるるところではなく、また政府によつても、自覺し十分に實行せられたところではない。

これを完成したものは、ナポレオン・ボナパルトである。ナポレオンは、全民衆の上に、その軍事的勢力を立脚せしめた。それは、非常に確實な、信頼し得るものであり、その行くところ、全ヨーロッパを席捲し、舊式の軍隊が、これに對抗した限りにおいて、勝負は決定的であつた。これがナポレオンの軍事的成功の基礎であつた。しかしながら、その相手の國家においても、順次その軍事組織を國民的基礎の上に確立せざるを得なかつた。

かくて戦争は、ボナパルトの出現を機として、先づフランス側において、次いで列國側において、再び全國民の事業となることによつて、全然その性質を一變することとなつた。といふよりは寧ろ、その本來の性質、その絶對的完成に著しく接近したといひ得よう。用ゐられる手段にも、もはや如何なる制限もない、そんなものは政府および國民の剛力と熱狂との中に消え失せてしまつた。戦争遂行の剛力は手段の老大なることと收め得らるべき成功の廣大なることと、併せてまた人心の強烈なる昂奮によつて、素晴らしく高められ、全軍事的動作は専ら敵の倒滅を目標とすることとなり、一度び戦端が開かれた以上は、敵が完全に起つ能はざるに到つたときでなければ、戦争の中止とか、媾和談判などといふことは問題とならなかつた。

かくのごとくして、戦争の本領は、あらゆる因習的な羈絆から解放されて、その本來の威力のある限りを發揮するに至つたのである。その原因を尋ねれば、畢竟するに民衆自身がこの大國家的事業に参加するに至つたがために外ならず、而して、その参加たるや、一方においては、フランス革命が諸國の内部に惹起せしめた諸事情に由來するが、他方においては、フランス國民のために、諸國民がその存亡を脅されるに到つたことに由來してゐる。(下巻四七五—四七六頁)

フランスの革命およびナポレオン・ボナパルトによつて、齎された戦争上の變革は、偉大なるものがある。それは革命の中に原因を探求し得る。

「フランス革命が外部に對して及ぼしたとえらゝい影響は、明かにフランスの用兵上における新手段および新見解の手に求めらるべきではなく、寧ろ完全に一變したる政治および行政技術、政府の特質、國民の狀態等その中に求めらるべきである。他の諸政府がこれらの事物を正しく認識せず、慣用の手段をもつて、その勢ひ破竹のごとき新兵力に對抗せんとしたこと——これらは何れも、政治の過失である。」(下巻五一〇—五一二頁)

かくのごとく、政治の變遷は、戦争の形態を變化せしめる。「戦争が政治に所屬するとすれば、それは當然政治の性質によつて特徴づけられる。政治が大規模でその威力が大であれば、戦争もまたさうである。その程度には際限がなく、かくて遂に戦争が、その絶對的の姿に達することが可能である。」(下巻五〇三頁)

H 戦争の絶對的形態。

ナポレオンの戦争に現はれたやうな「何ものをも粉碎して止まない、新なる絶對的戦争の概念」が、こゝにおいて、獲得し得られる。(下巻四七五—四五八頁)この概念は、實に一八〇五年・一八〇六年・一八〇九年における戦争とそ

の後に於ける諸戦争によつて獲得せられるのである。絶対戦争においては、最後の勝利のみが考へられる。

「戦争の絶対的な姿においては、一切が必然的な理由によつて成立し、一切の事象が、相関聯して間断なく繼續してゐる。そこには、實體のない、どつちつかすの空隙といつた様なものはない。かくてその中には、多種多様の相互作用にあり、相繼いで起る戦闘の全系列は、一個の體系をなしてをり、またそれぞれの勝利には極限點があつて、それを超ゆる時は、損害と敗北とを招くのみであり、これらの自然的諸事情は、唯一個の結果、即唯一個の終局的結果においてのみ結實するのである。この結果に到達するまでは、勝利についての如何なる決定も與へられたとはいへない。即ちそこには、損も得もないのである。かかる場合には、不斷に次の格言を想起しなければならぬ。曰く榮冠は最後の勝利者に與へらるべしと。かくてこの見地よりみるときは、戦争は一の不可分のな全體であり、その各肢節(個々の結果)は、たゞその全體と關聯してのみ、價值を有する。」(下巻 四五三頁)

かくのごとき戦争の本來の性質を具現するものが、ナポレオン時代の戦争であるが、かかる戦争の絶対的形態がそれ以後の戦争形態であるか否かについては、クラウゼウィッツは、速急の斷定を下してゐない。しかしながら、彼は、戦争の歴史的発展の最高段階としての絶対戦争の可能性を否定するものではなく、寧ろその必然性を認めてゐるかのごとくである。

クラウゼウィッツはいふ。

「かかる状態が永久的なものであるか、ヨーロッパにおける將來の戦争は、すべて國家の全力を擧げて行はれるか、従つて、國民と直接の關係ある大利害のためにのみ行はれるであらうか、あるいは又漸次に再び政府と民衆との

疎隔状態に出現するであらうかについては、これを斷言することは困難であらう。われわれも、またかかる斷言を下さうなどといふ大それた考へを抱いてゐる者ではない。しかし今吾人が次のごとく主張するならば、それは正當な主張として、首肯されるであらう。といふのは外でもない、一體戦争の本性の發揮が羈束されてゐたのは、全くかかる羈束なき場合の威力が覺られなかつたといふ事に原因してゐる。それゆえに一度かかる制限が切斷された以上は、再びこれを作り出すといふことは、容易のことではない。少くとも戦争が重大なる利害問題に由來してゐる限り、相互の敵對は、必ず晩近の戦争において見られたごとき激烈なる爆發をみることであらう——といふにある。」(下巻四七六—四七七頁)

クラウゼウィッツは、その「戦争論」をいつも、現實の歴史的材料をもつて填めてゐる。彼の主張は、さういふ具體的な基礎の上に構築されてゐる。その哲學的基礎において、ヘーゲルの深甚な影響を受けながら、彼はヘーゲル亞流の觀念論的抽象論に捕はれてゐない。そこに、クラウゼウィッツの戦争理論家としての偉大さがある。しかしながら、クラウゼウィッツ將軍といへども、その現實を乗り越へて、その理論を建設することは出来なかつた。それは、現實的な戰略並に戰術の研究者として當然のことであつて、そのゆえに、クラウゼウィッツの理論の價值を抹殺しようとするのは、當を得てゐない。彼の價值は、戦争の本質を、その政治上の關聯において、研究した點にある。この點における彼の理論的貢獻は、戦争理論史上、不朽なものであらう。

たゞ、彼はなほ將來を豫見することは出来なかつた。この點において、彼の批判者が現はれることは、寧ろ當然のことと屬する。殊に戦争の規模とその國民との關係が、著しく増大してゐる現代において、彼の批判者が出ないとなれば、それは寧ろ不思議である。この不可思議は、實現されてゐない。われわれは、ドイツの第一次ヨーロッパ

戦争の参謀總長ルーデンドルフにおいて、最も俊烈な批判者を見出してゐる。

ハ、ルーデンドルフのクラウゼウィッツ批判

一九三三年のミュンヘンの一揆に、ヒットラーと行動を共にしたルーデンドルフは、一九三五年に「全體戦争論」(Der Totale Krieg)を著述して、クラウゼウィッツを批判した。ルーデンドルフは自ら「戦争は現實であり、一族の生活における最も眞面目な現實である」とし、従つて、彼自身「すべての理論の敵」と宣言し、すべてを自己の體驗によつて判断するといつてゐる。かくのごとき見地に立つて、ルーデンドルフは、その世界大戦の經驗から全體戦争論を主張せんとするものである。彼はクラウゼウィッツを批判する。即ち、クラウゼウィッツが、主張した戦争の目的は敵の戰鬪力の撃滅にありとしたことは、戦争遂行の不磨の鐵則であるが、この鐵則以外のクラウゼウィッツの理論は、既に過去の業績に屬し、彼の理論に執着することは、たゞ理論的紛糾を増加するのみである。故に、すべてのクラウゼウィッツの理論は、一顧を與へる價值のないものと斷定した。

これらのクラウゼウィッツ批判に對しては、クラウゼウィッツに同情すべき點がある。彼が、對象としたところは、フリードリッヒ大王とナポレオン時代の戦争であり、その時代の戦争が、現代のそれと、その意義においても、その規模においても異なることは明かである。このことは、クラウゼウィッツ自身が「社會的狀態及びその諸事情こそ、戦争の眞の地盤であつて、戦争は、これによつて條件づけられ、制限せられ、緩和される。けれどもこれらの事柄は、戦争そのものの屬性ではなくて、戦争そのものにとつては、それは一の與へられた事實たるに過ぎない」といつてゐる點から明かであつて、彼は戦争形態の絕對性を主張せんとするものではない。「各時代の戦争には夫々独自の性質、之を制限する独自の條件」があり、各時代には、各々独自の戦争理論があるべき筈であることを主張

してゐる。この點にクラウゼウィッツの發展の見地があり、社會現象としての戦争を理解しようとする鋭い頭腦の閃きがある。

クラウゼウィッツは、戦争の本質を政治に求めたことは、既に詳論した。この點はクラウゼウィッツの戦争論の最も價値ある點である。たゞ彼が政治に胚胎する戦争の政治關係に對して、メスを一層深くしたならば、より理論的であつたと考へられる。

しかるに、クラウゼウィッツは、この最も價値ある點において、ルーデンドルフの批判を受けたのである。彼は「いふ戦争と政治とは民族の生存に役立つものである。しかしながら戦争は、民族的生活意志の最高の表現である。故に、政治は、戦争遂行に奉仕しなければならぬ。」

ルーデンドルフは、第一次世界戦争とそれ以前の戦争との本質的差異を指摘する。彼によれば、世界戦争以前の戦争は、クラウゼウィッツのいふ戦争の「絕對的狀態」に到達したものではない。それは高々、政治戦争の時代に過ぎぬ。戦争は、軍隊の仕事に限定されてゐた。しかるに、「世界戦争は、過去百五十年來のすべての戦争に比して、全く異なる性質を示してゐる。それを遂行するものは、交戦國の軍備兵力であるばかりでなく、國民自體が、戦争遂行の役目に置かれる。而して、戦争は、國民自體に向けられ最も深い困難に立ち至るのである。」これ故にルーデンドルフは、世界戦争および今後の戦争を、全體戦争と名づける。世界戦争後において、全體戦争は、飛行機の改善及び増加、すべての種類の爆弾、人民に投下する傳單及びその他のプロパガンダ材料、並に敵側に宣傳するラヂオ施設の改善並に増加その他によつて、一層深刻の度を増した。世界戦争において、敵軍が戦線において、數十、萬百キロメートルに互る攻撃地帯で闘つたとき、その國の人々は、戦争同様に、最大の困苦を経験したのであつた。

今日においては、戦場は、言葉の眞の意味において、参戦國民の全範圍に涉つてゐる。従つて、全體戦争は、國民の生活が脅され、その解決を決定したときにおいてのみ、行はるべきものである。従つて全體戦争は、單なる政治の繼續たる本質を有するものではない。それは國民生存の問題だといふのである。

ルーデンドルフは、かくのごとき戦争の本質的變革は、必然的に政治の變革とならねばならぬといふ。この點において、クラウゼウィッツと正反對の立場に立つてゐる。クラウゼウィッツはいふ。戦争が政治に所屬するとすれば、それは當然政治の特質によつて、特徴づけられる。政治が大規模でその威力が大であれば、戦争もまたさうなる。と。これに對して、ルーデンドルフは、戦争の本質が變化したことは、動かすべからざる事實であるから、政治の任務の範圍が擴大されねばならぬし、政治自體が變らねばならぬといつてゐる。この政治の擴大及び變革の結果を、彼は全體戦争に對して、政治の全體的性質の獲得、簡單に「全體政治」といつてゐる。全體政治は全體戦争のためのものであり、來るべき全體戦争において、全國民に最大の戦争能率を附與すべき政治である。

「戦争は、生活維持のためにする國民の最高の緊張であるから、従つて、全體政治は、既に平時において、戦争における國民のこの生存闘争の準備をなさねばならぬ。戦争の收穫に遅れをとり、敵の計畫によつて、完全に破壊せられぬやうに、この生存闘争の基礎を強化しなければならぬ。戦争の本質は變化した。従つて政治の本質も變化しなければならぬ。クラウゼウィッツの全理論は放棄されねばならぬ。戦争と政治とは、國民の生活維持に役立つ。しかし戦争は國民の生存意思の最高の表現である。故に政治は戦争遂行のために奉仕せねばならぬ。」この章句は、ルーデンドルフの全體戦争と全體政治との關係を最もよく示すものである。ルーデンドルフが、この全體政治において要求せんとするもの、従つて全體戦争において、最も基礎的事實として、認識せんとする第一

の要素は、國民の精神的一致團結である。この精神力は、ルーデンドルフが、最もその必要を強調せんとするところであつて、彼が世界大戦の経験によつて得た経験である。ドイツの敗戦は、この精神的緊張の破壊によつて、齎された。ルーデンドルフは、反ユダヤ主義者として、ドイツの精神的基礎を動搖せしめたものを、ユダヤ人の活動であるとする。この活動は、二つの部門に分れる。國際資本の勢力と國際革命運動がこれである。この活動に加へるのに、イギリスの饑餓封鎖を數へる。かくのごときドイツ人の精神状態の崩壊作用に對する防衛手段は、世界大戦の當時において、極めて緩慢であつて、遂にその崩壊が來たのであつた。彼は、この故に、全體政治の任務として、鞏固なる國民精神の醸成を主張した。しかし、國民精神の統一は、單なる機械的統一では効果がなく、眞に人種並に宗教的生活に即したものを要する。この點において、ルーデンドルフは、日本國民における精神的一致が極めて堅固であつて、全體戦争の遂行に最もよき條件を提供してゐることを激稱し、キリスト教精神が、このために不適當であることを指摘してゐることは、われわれには興味がある。

しかし、ルーデンドルフは、ドイツ的精神強化の方法の缺如を主張するものではない。彼は人種的認識の上に立つて、ドイツ民族の精神上的優越性を保持するための生物學的諸施設を實行することを要求する。これとともに、男子および婦人が人口増加のために、民族的義務として母性的任務を遂行すること並に而して、このためには、平時における精神的訓練を行ふべしとした。

しかし、戦争の遂行は、單に精神力の養成充實のみをもつて、足れりとするものではない。多くの不満は經濟的缺乏に基因することは、ルーデンドルフの見逃さぬところだ。そして、また全體戦争が巨大な軍事需要を必要とすることも、彼の経験によつて認識してゐるところである。こゝに、彼は戦争と經濟の關係を論ずるのである。ルー

デンドルフは、戦争に対する軍事需要の充足と、国民生活維持の重要性の認識として、経済を見るのであるが、すべての「理論の敵」としての彼は、戦争が民族生存のための闘争であるといふ認識に、その出發點を置きながら、それを深く切り下げて、戦争の基礎としての経済を見ようとしなない。この點は彼に限らずファッシスト的戦争觀を抱くものの一般的傾向である。ファッシスト的戦争論者は、戦争遂行における経済の重要性を見るのである。ルーデンドルフも、かゝる見地に立つて経済を見てゐる。そして、彼は、世界大戦における経験を語るものであるが、それ以上に出てゐない。ルーデンドルフによれば、次の戦争は持久的であり、従つて益々全體戦争としての性質を持つ。かくのごとき場合において、最もよい戦争の條件は、自給自足經濟を遂行し得る國家のそれである。しかるに、ドイツは、この立場になく、その生活資料並に生産原料の多くを、世界貿易に依存することは、その弱點の一つに數へられてゐる。この弱點の克服のためには、農業および軍事工業が保護奨励されねばならない。このためには、勞働力の問題が起つて来る。男女青年に對する一般的勞働奉仕制度は、そのための訓練である。これらの廣義の軍事需要を充足するためには、經濟の戦時編成が必要である。ルーデンドルフは、第一次ヨーロッパ戦争におけるドイツの經濟的施設を研究して、次のやうにいつてゐる。

「必要な食料、飼料および工業原料調達のための管理には、非常に中央集權的な施設を採用した。しかし、かかる組織において、しばしばみるやうに、その目標をはるかに超越し、自主的行動の餘地は少しもなかつた。これによつて生じた強制經濟は、必要止むを得ぬ點もあつたが、しかし不適當な點が多かつた。管理は、もとより必要であるが、お役所式と拘子定規は排斥すべきである。ユダヤ人のワルター・ラテナウが行つたこの中央集權は、また既に大戰前からユダヤ・ローマ教系の國際資本の手に移りかけてゐたドイツの經濟を、完全に、その手に歸せ

しめる目的を含んでゐたのである。この企圖は、大戰中および大戰後において、大いに達成されたが、この中央集權は、各人の生産の興味と責任觀念とを奪ひ、従つて、その能率を減殺した。國民の團結も、亦購入會社の遣り口では達成されなかつた。その態度と處置とは、一般國民の不平を昂めるの動機となり、又賣惜み、密賣を誘發することにもなつた。さればとて、かかる不正行爲は、決してそれがために罪惡を免れ得るものではない。同胞をして數時間も食糧店の前に行列を作らしめたことは、不平者に好都合な運動の可能性を與へるものであつた。經濟上の處置は深く國民の心情に影響するものである。従つて、常にその必要を理解せしむる處置をとるとともに、慎重且つ最も嚴格な正義感の下に實行する必要がある。もし、この點を怠り、不正や收賄のために、かかる強制經濟の公正に對する信頼が動搖し始めたならば、實に憂ふべき事態を發生すべく、かかる強制經濟は、種々の障害のために、自ら生産に従事し、勞働する者達のすべてから拒否せられざるを得ざるに至る。」(經濟と全體戦争の章)

九 總帥論 ルーデンドルフとクラウゼヴィッツ

全體戦争は、以上のやうに大規模のものであるが、ルーデンドルフはこれを實行し、指揮するものは、總帥(Feldherr)であるとした。彼は總帥について、次のやうにいつてゐる。

「頭腦と意志と膽力とをもつて、國民生存のために、總力戦を行ふべきものは、總帥である。何人も總帥の擔ふ責任を分つことは出来ぬ。たとへ、戦争指導に當るも、單に他人の思想または意志を實行するに止まり、いはゞ食事と食事との間の出務時間だけ戦争を考へてゐる者は、決して總帥の器ではなく、最も困難なる独自の業務と最高の自己の能力と最も堅確なる個人の意志とを必要とするこの地位は、偶像的人物などの占むべきものではなく、

かかる人物は、その嚴肅重大性を濟すのみであらう。

總帥たる者は、最高の地位に立つべきである。しからざれば、弊害が起り、支障が生ずる。總帥が眞に首位に立つてこそ、敵を壓倒して、自己の民族を保持すべきその行動に統一と進力を持たせ得る。總帥のこの事業がすべてを抱括すること、總力戦のすべての生活を抱括するのと同様である。總帥は國民生活のすべての分野における決定者であり、その意志が基準となるべきである。(總帥の章)

ルーデンドルフは、總帥が、一切を決定すべきもので、また彼は、その力を持たねばならぬと主張する。

「測り難き偉大な力が總帥から發揮されるべきもので、總帥は全くそのために、この世に生れ出たのである。天分を具へた者でなければ、全然總帥たることを得ぬ。飽くまで勝たんとする意志が總帥より發して、軍隊および國民を貫き、それをして、英雄的行動に出でしむるのである。

總帥をして、總力戦において、自ら負ふべき責任に克く堪へ得させるために、平時からその職に當て置くべきである。

總帥は、戦時に國民のすべての力を、或は直接國防軍において、または國內において、十分に使用することについて責任を持つ。(總帥の章)

以上のやうに、ルーデンドルフは、全體戦争における總帥の地位を、最も重大視する。戦争は總帥の指導の下に遂行せられる。従つて總帥の任務は、極めて重大である。總力戦は總帥に對し、實に無限の要求を課するものである。今日の總帥には、従來の總帥、否フリードリッヒ大王のごとき總帥といへども、未だ會て要求されたことのないほどの働きと精力とを必要とする。しかしながら、總帥といへども、單獨に戦争を指導することは不可能である。

國民が、その指導によつて動かねばならぬ。ルーデンドルフは、その全體戦争論を結ぶのに、次の言葉をもつてしる。

「一國民の歴史にも眞の總帥の現はれることは、稀である。平時における國防軍の指揮官が戦時において、果して眞の總帥たるを得るか否かは、たゞ戦争のみが決定を與へ得る。國民が總帥に服従して力を効す場合、即ちその生命維持のために戦ふ總力戦の指揮者に身を捧ぐる場合において、始めて總帥を戴くに値する。かかる場合には總帥と國民とは互に一體をなすか、しからざる場合——かかる國民には總帥の存在も無駄である。」

ルーデンドルフの全體戦争論の性格は、現代の戦争が民族の存亡の問題に關聯し、そのために、民族の余力を擧げて、戦争を遂行するといふ理由の下に、戦争に對する政治の奉仕を主張した點にある。總帥論は、かかる戦争性格論の直接の推論的結果である。ルーデンドルフの總帥論は、一つの總帥獨裁論であり、この點において、クラウゼウィッツの戦争に對する政治指導の理論と眞正面に對立するものである。勿論、クラウゼウィッツといへども、政治指導者と戦争の總帥の一致することを、排斥するものではない。この點は、クラウゼウィッツがスエーデン王グスタフ・アドルフ、プロイセンのフリードリッヒ大王に與へた評價をみれば、直ちに判明する。しかしながら、クラウゼウィッツは、原則として、戦争に對する政治の指導を主張して止まぬ。それは、戦争の本質が、政治から出ていることによつてゐるのである。クラウゼウィッツは、戦争の本質論から戦争と政治との關係を論究し、ルーデンドルフは、現代戦争の現象形態から總力戦(全體戦争)の概念を導き出し、これと總帥との關係を強力に主張し、その總帥獨裁論に到達したのであつた。

クラウゼウィッツとルーデンドルフの間には、填めることの出来ない大海が横はるものであるか。その主張の形

態においては、對立して、相互に否定してゐる。しかしながら、われわれが考へなければならぬことは、クラウゼウィッツの「戦争論」(一八三二年版、死後出版)とルーデンドルフの「全體戦争論」(一九三五年版)との間には、百年の時間が経過してゐることである。この百年間に、クラウゼウィッツのいふ絶對戦争の形態は、ますます進展し、第二十二世紀に入つて、第一次ヨーロッパ戦争において、戦争の形態は、最も著しい變革を遂げた。ルーデンドルフは、クラウゼウィッツの批判において、この時間の経過を無視してはならないまでも、輕視してゐる。そして、現實に即することを宣言して、自ら「理論の敵」とさへいつてゐるルーデンドルフは、かかる時間の経過と理論の構造の變遷すべき點を熟考せず、一舉にして、クラウゼウィッツ理論の排撃を行つてゐる。そこに、第一次ヨーロッパ戦争にあらゆる窮極の敗戦經驗者としてのルーデンドルフの焦慮がある。われわれは、クラウゼウィッツとルーデンドルフとの間の大海を埋めるものが、戦争形態の發展を把握することにありと信ずる。かくのごとき戦争形態の把握と、それに對する理論の適用とは、クラウゼウィッツとルーデンドルフの對立的立場を止揚せしめて眞に現代戦争の本質を把握すると同時に、戦争と政治との本質的關係を闡明せしめるであらう。われわれは、以下において、かかる理論的試論の概要を記するであらう。

一〇 現代戦争の本質 —— わたくしの現代戦争観 ——

現代の世界は、戦争の渦中にある。日本もまた五年に亙る支那事變を遂行しつゝある。東西兩洋における大規模戦争の展開、殊に獨ソの開戦は、今次の戦争をして世界戦争へ移行せしめる實質素因を、その内に包蔵してゐるからである。

戦争は、かくみるとき現代の強大國家に對しては、不可避の運命の一つであると言ふことが出來よう。戦争が生

起するためには、一定の外的並に内的條件を必要とする二つの國家または國家群の對立の條件が、これだ。相反する意圖を持つ二つの國家または國家群が、武力的手段に訴へて、その意志を強行しようとするとき、戦争は發生する。われわれは、かくのごとき現代の戦争の現象において、戦争の本質を分析し、その性格を把握するとともに、その本質理論の構成に努力しなければならぬ。

クラウゼウィッツは、既にいつたやうに、戦争を、常に政治に對する手段として考へてゐる。實に戦争は、常に政治の手段である。クラウゼウィッツの觀察した戦争は、主としてナポレオン戦争である。ナポレオン戦争は、第十九世紀初期までの間において、最も大規模なものであつたが、いまだ單一武力戦争の形態を出ないものであり、その作戦は常にナポレオンの政治的意圖によつて制約せられたものである。その戦争は、一國の既存の武力をもつて行はれたものである。従つて現代の戦争とは、その規模と本質とを異にしてゐる。ナポレオン戦争は、當時としては、全國民戦争であり、その戦線も、戦争の経過においては長大なものとなつてゐるが、戦争の規模は、フランスの經濟力によつて規定されたものであつて、現代の大規模戦争に比すべくもない。その經濟的基礎を徵發に置くところのものであつた。かかる意味において、それは、武力にその主たる基礎を置くものであつた。さういふ意味において、われわれは、それを單一武力戦争といふ。

かくのごとく戦争は、目的のための手段であるが、現代の戦争は、大規模であり、最も大きな消耗を伴ふものであると同時に、國家と國家との戦争が國家群の間の戦争に進展することによつて、長期戦化するに至つてゐる。

戦争の様相は、第一次ヨーロッパ戦争によつて、著しく變化してゐる。

第一には、戦争が單一武力戦の形態から總動員戦争の形態へ轉換したことである。戦線の戦鬪と同時に、その

戦線と連絡する銃後の戦闘力を動員する戦争に發展した。

第二には、戦争に要する兵員の増加である。第一次ヨーロッパ戦争における兵力動員は、聯合國側と同盟國側とを併せて六千萬に及び、各國についてみると、一國人口の一割から二割を動員してゐる。この數は、動員可能人口即ち全人口の二割五分(十八九歳から四十五六歳までの男子)に對して、甚しい高率であるといはねばならぬ。

第三 かゝる總力的動員の下に行はれる戦争は、從來の戦争に比較して、巨大な消耗行動である。従つて、第二十世紀初葉までの戦争のやうに蓄積軍備と徴發と戦時における軍需生産活動の動員のみでは、その需要に應ずることは出來ない。

第四 戦争の規模の擴大と同時に、戦争の機動化並に立體化は戦争を横斷的戦線における正面的攻防から縦斷的戦争領域を必要とするに至つてゐる。従つて、戦争の損害を一般的たらしめてゐて、國內の修理復興のために、巨大な物資の必要が存在する。

かゝる戦争形態の下においては、國家の全活動は擧げて、戦争目的のために使用されねばならぬし、その國家の構成人口の全體も、また何等かの意義において、戦争目的の達成のために動員されねばならぬ。第一次ヨーロッパ戦争は、かくのごとく單一武力戦争から總動員戦争の形態を持つに至つた。戦争當事國の持つてゐるすべての力を擧げて、これを武力戦遂行の支援に集中するに至つてゐる。即ちすべての人間力と生産力と思想力とを、武力戦に集中動員する。しかしこの場合、問題は、一國のすべての力を一時的に動員するに過ぎず、その全力を恒久的に再編成するに至つてゐない。

かゝる戦争への總動員でさへ、戦争開始後において、始められるのでは、既にその時機を失してゐる。戦争のために、一切の政治、經濟、文化の諸部門を準備し動員することは、平時において開始されねばならぬ。

その意味において、政治、經濟、文化は戦争に奉仕しなければならぬと、ルーデンドルフ將軍は、その「全體戦争論」の中で主張してゐる。

ルーデンドルフ將軍は、第一次ヨーロッパ戦争の經驗によつて、それを總力戦争としてゐるのであるが、それは實は總動員戦争であり、眞の意味における總力戦争ではない。且つルーデンドルフは、戦争に對して、政治、經濟、文化一般の奉仕を主張して、クラウゼヴィッツの手段としての戦争觀を否定する。もし、これらの一切が戦争自體を目的視とするならば、戦争は、その意味を失つて、單に鬭争のための鬭争に墮するに至る。そこにルーデンドルフの理論的缺陷がある。

戦争があらゆる國家に對して、不可避の運命として課せられてゐる以上、戦争の綜合的遂行のために、國家全體の再編成を必要とすることは、いふまでもない。しかしながら、その戦争的編成は、戦争における勝利を目指すものである。戦争における勝利は、相手國の戦意を撃滅し、わが目的を、そこに實現するにある。従つて、戦争の窮極における手段性は、そこに確認せられなければならない。戦争が手段であることは明白であるが、現代の戦争は、一國の部分的精力をもつてしては、遂行し得ない大規模のものあり、且つ一國における一階級または一部分の利益のために戦争せられた舊時の戦争と異つて、一國家または一民族の全生存を賭するの性質を持つに至つてゐる。國家や民族の生存は、その強力な戦闘力によつてのみ確保し得る。この戦闘力を組織し確保しないものは、生存否定の運命を免れ得ない。その意味において、現在の戦争は、民族生存を基礎として侵略を試みる帝國主義戦争よりも余

程の深刻性を持つてゐる。この戦闘のためには、単一武力戦争は、既に過去の歴史であり、一國のすべての既存施設に勢力を動員する總動員戦争をもつてしても、この生か死かの戦闘を完遂することは出来ない。そこに總力戦争が現代の形態として起つて来る。

總力戦争は一國のもつてゐる武力、政治、經濟、文化を總動員することをもつて足れりしない。それは、一國の持つすべての力を、戦争目的のために動員すると同時に、これを集中し、再編成して、一つの総合的戦争體制を樹立せんとするものである。

この體制樹立の政策は、戦争直前または戦時において、着手するのであつては、既に遅きの觀がある。民族のすべての力を平時において、かかる體制に集中再編成すべき努力が、強力に實行されねばならない。高度國防國家體制の確立が、これである。

従つて、總力戦争體制は、戦争完遂のために、一國の組織を根柢から再編成することを要請するものである。

ゆゑに總力戦争並にその體制は、國家が、その最終目標として達成しなければならぬところである。もし、國家がこの目標を達成することが出来ないとするならば、それは總力戦争において、敗者の地位に陥り、國家と民族の生存とが、否定せらるゝの運命に逢着する。かかる運命に陥ることを避けようとするならば、國家は、その全力を擧げて、かかる體制の確立に突進することを必要とする。かかる意味において、それは國家の最終目標であるといふことが出来るであらう。

しかしながら戦争は、總力戦争といへども、その終極においては手段である。戦争自體において、實現すべき高い目的がある。それは、一國の最高の政治を、そこに實現することである。現在における最高の政治は、一國の持

つ世界政策を實現せんとすることである。そこに民族の使命と生存との基礎條件が、横たはるからである。

現在の戦争において、かかる世界政策は、世界秩序の維持もしくは變改といふ點に現はれてゐる。日本とドイツとは、それぞれ、東亞における新秩序とヨーロッパにおける新秩序とを、その最高の世界政策として表明してゐる。このことは、世界新秩序を實現せんとする民族的使命と要求とに基き、これによつて世界の發展に資せんとするものである。しかるに、英米ソ聯等の一聯の國家が、この新秩序を否定しようとするのは、その持つところの舊秩序を維持強化せんとするのであつて、そこに現状維持の強い色彩がある。

世界の新舊秩序の根源的矛盾は、現代の總力戦争の形態において、根本的思想戦の形態として現はれてゐる。第一次ヨーロッパ戦争において、宣傳戦が存在し、思想戦が存在しなかつたのは、かかる戦争本質の根本的相違に基くものである。

國家の最高目的を實現するための總力戦争は、以上のごとく、國家の最終目標として理解せらるべきである。

以上のやうに現代の國家は、その世界政策を實現するためには、總力戦争體制を持たねばならない。それは、現實の事實である。この現實の事實に照應して國家全體は戦争體制に編成替されねばならない必要を持つ。従つて、世界政策は、國家の理念として表現せられ、その理念に應じての戦争國家體制が構成せらるゝ。われわれは、かくのごとく高い世界政策の實現を基準として構成された國家を、高度國防國家と呼ぶ。

高度國防國家體制は、一國の持つ政治、經濟、文化の諸部面と、その部面において活動してゐる全人的要素と施設とを、世界政策實現のために編成したところの國家である。總力戦争のための國家の再編成は、一つの恒常的體制としての意義を持つ。そこに總力戰的國家體制と總動員の戦時體制との差異がある。總動員體制においては戦争

終了後、復員の可能性がある。勿論總動員體制によつて、變化せられる政治並に經濟的部分の有することは明白であるが、その本質的部分における變化は復員において、従前の體制に復歸する。しかるに總力戦争體制は、その戦争が民族生存の死闘といふ本質から、無制限戦争たるの様相を現はす。そのための全力の集中編成が行はれるため復員といふ事實なく、それは来るべき世界新秩序における高度の國家體制の發展的存続である。

現代の日本國家は、高度國防國家體制を要求してゐる。それは、すべてのものを、その傳統としての建國の理想と、その現代的發展たる世界政策の實現のために編成しようとするものである。われわれは、かゝる高度國防國家體制を持つことによつて、始めて現代の最高國家體制を獲得し得ると同時に、世界政策の實現の可能性を獲得し得るのである。

一一 結論 クラウゼウィッツとルーデンドルフ

かくのごとく考へて來るとき、現代の戦争においては、クラウゼウィッツの戦争手段論とルーデンドルフの戦争至上論とは、その形態においてのごとく矛盾するものではない。ルーデンドルフは、現代の戦争において、國家における戦争遂行の優位を主張せんとするものである。クラウゼウィッツは、民族國家形成の過程の戦争において國家の優位を主張しようとするものである。

しかるに、クラウゼウィッツもルーデンドルフも、ともに戦争の時代的様相を固執することによつて、相反する結論に到達したやうに感ぜられる。クラウゼウィッツは、その絶對戦争の概念においては、キ、それらしい理論に到達しながら、戦争における政治優位論に固執して、それを充分に發展せしめることが出来なかつた。ルーデンドルフは、彼が參謀總長として、苦痛をなめた第一次ヨーロッパ戦争の經驗によつて、戦争優位論を強調した。この

對立してゐる主張は、兩者の將帥論をみるとき、多くの部分において一致する。クラウゼウィッツは、グスタフ・アドルフ、シヤアル十二世、フリードリッヒ大王を戦争における將帥として推してゐる。ナポレオンが、その頂點に立つてゐることはいふまでもない。ルーデンドルフにおいても、フリードリッヒ大王は、古今の將帥である。しかるに、クラウゼウィッツにおいては、これら三人の國王は、國王としての政治的地位と將帥とを兼ねたがゆえに、古今の將帥たるの價値を獲得したといふのであり、ルーデンドルフにおいては、將帥なるがゆえに、總力戦争においては、彼が一切の國家的現象前に政策の指導に任じなければならぬといふのである。

この二つの理論は、第一に、戦争における當面の勝利は、國家の存亡にかかはる重大事實なるがゆえに、國家は、まづ目標として、戦争における勝利を獲得することを要するといふ點と、第二には、戦争が窮極において、何等かの意味の目的を持つものであり、それは手段である。この戦争の手段性は、政治の目的のために役立つといふのである。戦争における勝敗は、最も重要であり、従つて、まづかかる戦争の勝利が、何を措いても追究されねばならぬ。政治も經濟も文化も、それに奉仕しなければならぬといふのが、ルーデンドルフの主張である。ルーデンドルフは、一國の政治・經濟・文化と一民族の生存興亡といふ事實とを、あたかも無關係なるかのやうに、説いてゐる。しかしながら、民族の生存興亡は、一國の政治・經濟・文化の綜合的結果である。もし、さうだとするならば、戦争の原因の中に、かかるものが存在しなければならず、従つて、またその目的の中にも、かかるものが存しなければならぬ。このことを否定するものがありとすれば、それは、戦争を戦争自體として要求し遂行するものであつて、戦争の意義を明確化することは出来ない。戦争は、民族の生存興亡に對する本能的作用として起つたであらうことは、われわれが戦争の起源について研究するとき、明かとなるであらう。たゞ、本能的現象としての戦争が、文

化的現象としての意義を持つとき、始めて人類の生存に對して價值あるものであり得る。

ルーデンドルフとクラウゼウィッツの二つの主張は、かかる意味において、相互に補充する意味を持つやうに、わたくしには考へられる。たゞ現在の戦争は、この二人の戦争論者の異なる時代以上に出てゐることは注意を要することである。それは、クラウゼウィッツの時代に單一武力戦争が行はれたとすれば、ルーデンドルフの時代には、總動員戦争が、そして現在では總力戦争が行はれてゐる。それぞれの時代におけるそれぞれの戦争形態である。

昭和十六年九月二十一日稿

イー・ダブルユー・エックカード教授著『ダブルユー・
エス・ジェヴォンズの経済學』

高橋誠一郎

ウィリアム・スタンリイ・ジェヴォンズは早くから我が國に傳へられることの最も多かつた經濟學者の一人であらう。彼れが一千八百七十八年に、ハックスレイ、ロスコー及びバルフォア・スチュアート等諸教授の編纂に係る *Science Primers* 叢書中の二冊として公にした *Political Economy* は、明治十五年、安田源次郎氏により、同十七年、渡邊修二郎氏により、同二十二年、嵯峨正作、古田新六兩氏により、同年、杉山重威氏により、大正十一年、小田勇二氏により邦譯上梓せられ、其の一千八百七十五年の著 *Money and the Mechanism of Exchange* は明治十六年、大島貞益氏によつて邦譯せられ、文部省編輯局から出版せられ、而して彼れの主著 *Theory of Political Economy* は大正二年、我が小泉信三博士によつて邦譯せられ、福田徳三、坂西由藏兩氏編纂の『内外經濟學名著』の第一冊として發兌せられた。我が經濟學界の偉材故福田徳三博士は、ジェヴォンズの業績に對して最大なる讃辭を呈するに吝ならざるものであつて、前掲小泉氏譯の序文に於いて「予は經濟學史の全體を通じて最も偉大、最も絶倫なる破

イー・ダブルユー・エックカード教授著『ダブルユー・エス・ジェヴォンズの經濟學』 一一七 (三三二)